

防衛研究所所長開会挨拶

皆さん、おはようございます。防衛研究所創立 50 周年を記念する安全保障国際シンポジウムに多数の方々のご参加を頂きましたことを防衛研究所一同を代表して心から御礼申し上げます。赤城防衛庁副長官はじめ防衛庁の皆様には通常国会冒頭のご多忙の中、お出でいただきました。重ねて御礼申し上げます。

当研究所は、防衛政策に関する研究と高級幹部自衛官に対する教育及び近代日本に関する戦争史の研究を主な任務として 1952 年に設立されております。当研究所は、設立以来、この 3 つの分野で多くの業績をあげてきたものと考えております。今後は、このシンポジウムをはじめとする国際的交流の分野でさらに大きな成果をあげるべくベストを尽くしていきたいと考えております。ご参加の皆様には、今後とも貴重なご教示とご協力を心からお願いするものであります。

近年、冷戦の終結と共に、軍隊が果たすべき役割が大きく変化しており、それに伴って我々が取り組むべき研究、教育の分野も大きく変化しております。その変化の一つは、一言で言えば、軍事と非軍事の境目が流動的になったことであります。今日の国際社会は戦争時のみならず日常的に軍隊の役割を必要とするようになり、軍隊は、ますます深く国際社会の網の目の中に組み込まれるようになっていきます。わが国においても、自衛隊は、災害派遣に止まらず、PKO や在外邦人の避難といった国際社会における活動がその任務に加えられてきております。さらに、一昨年の 9.11 以後の国際社会の対テロリズムの努力は、こうしたトレンドをますます加速しているように見えます。

約 60 年前、真珠湾を奇襲した日本帝国海軍部隊は、帰りにミッドウェイを攻撃せよとの指示に対し、「相撲の横綱に帰り道で豆腐を買って来いと言うようなものだ」といって拒否しました。今、軍隊についてのこういう認識が全く誤りであることは明らかです。たとえ横綱であっても、けが人の手当てや炊き出しといった雑用をこなしていかなければならない、それが今日の現実であります。

そのことはまた、我々に大きな課題を投げかけています。それは、人権と主権の絶対性、国家でない主体に対する国際社会の自衛システム、新たな時代における軍隊のデザインやドクトリンのありかたといった問題であります。

今回のシンポジウムは、当研究所が主催する国際シンポジウムとしては5回目となります。過去の会議においては、今日の国際的安全保障に関する問題意識を共有する多くの国の多くの方々のご出席を得てまいりました。今回も我々は、元フィリピン共和国大統領のフィデル・V・ラモス閣下、わが国で最も広い視野をもった専門家である船橋洋一さんをはじめ、内外の多くの専門家の方々のご参加を頂くことが出来ました。

勿論私は、今回の2日間の会議だけで、我々が直面するすべての課題に回答が得られるとは思っておりませんが、素晴らしいゲストの方々との意見交換が、多くの有益な示唆と、これからの当研究所のすべての仕事に対する強い勇気を与えてくれるものと確信しております。参加いただいたゲストの方々に改めて御礼を申し上げ、ご挨拶といたします。

平成 15 年 1 月 21 日

防衛研究所所長

柳澤 協二